



永野のり子、ステップスギャラリー2年ぶり4度目の個展である。永野は常に変化を繰り返している。今回の展覧会に出品した作品を見て、更にそう思った。一時は日本画的な感覚に寄っていた感があったが、今回はより永野らしい、永野でなければできない作品に仕上がっている。それは単なる永野の心境の変化ではない。作品が変化する条件とはアーティストの内部の問題か、アーティストを取り巻く外部の変容になると考えられるが、そうでない場合もある。理由が分からないということだ。今回の永野の変化にそれを感じる。永野は屈強の精神を携えている為、ちょっとやそとのことでは変化しない。するとなるべきしてなったとしか考えられない。大きな写真の作品がそれである。これまで水面に映り込む空または雲のような印象を与える作品群であったが、今回の作品は何かが違う。

それは曲線を多用した影という濃みである。濃といってもいいのかも知れない。それが単調に描かれれば描かれるほど、複雑な様相を呈する。ここに私は何を見たのであろうか。ゴッホか、ムンクか、マネか。いずれにせよ、ヨーロッパの近代美術と呼ばれている作品群の何かを感じたのではないだろうか。私自身も変化していく。なぜそうなるのか分からないことが多々ある。それでも私はその変化を甘受し、認め、新しい自己を形成していかなければならない。それならば永野の作品が今までと異なって見えるのは、私の問題であろうか。そう、誰の問題という犯人探しは必要がない。特のこの最悪な時代のせいにしたくない。そのような時代に飲み込まれないこそ、我々人間存在の理由と証が隠されている。永野の作品から、そのような強い意志を感じたのは、私だけではないのだと思う。

